

運動遊びにおける「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」育成の可能性Ⅰ

西 川 正 晃 煙 山 千 尋
岐阜聖徳学園大学教育学部

A study of the possibility of a desirable growth state by the end of childhood by upbringing with exercise and play

Masaaki NISHIKAWA Chihiro KEMURIYAMA

キーワード：幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 自ら選んでする遊び 運動遊び
幼児期の教育における見方・考え方

Ⅰ. 研究の背景と目的（はじめに）

2018年4月より、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改訂（定）され本格実施となった。平成元年の改訂（定）から流れている、「環境を通した教育」を踏襲するとともに、今回の改訂（定）では、遊びを通して育まれる資質・能力を明確に示していることが特徴といえる。

これまでは、遊び込むことで育つ具体的な資質・能力の描き出しは具体的ではなかった。このため、幼小連携においても、幼児期で育ったどのような力を、小学校の教科等を中心とする学習で重視すればよいのか見えにくい状況であった。今回の改訂（定）では、こうした資質・能力を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」としてまとめ、具体的に10の姿として示している（図1）。

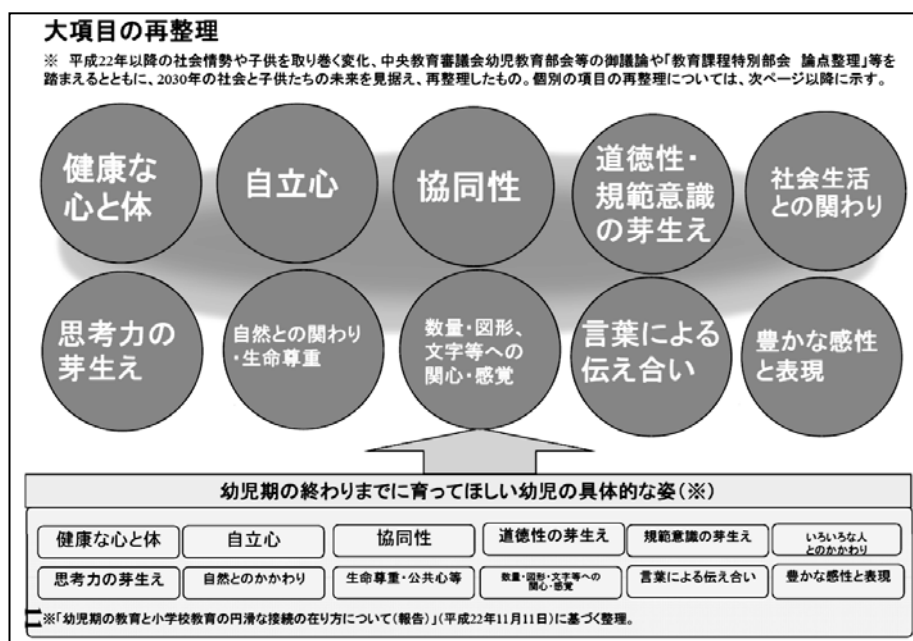


図1 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿¹⁾

これらの姿は、幼児たちの園生活を通して育まれる具体的な姿であり、幼児教育を通して保育者が幼児の育ちをみとる視点となるものである。幼児教育に携わる立場だけの視点ではなく、小学校への学びの連続性を考え、小学校学習指導要領には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた指導を行うようにと明示されている。このように、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼児教育

のみならず、小学校教育においても、児童の育ちをみる共通のスケールとしての意義がある。保育者は、遊びの中で幼児が発達していく姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点としてみとり、必要な体験が得られるように環境を構成したり、援助を行ったりすることが求められる。

幼稚園教育要領解説には、「実際の指導では（中略）到達すべき目標ではないことや、個別に取り出されて指導されるものではないことに留意する必要がある」²⁾と述べられ、あくまでも環境を通して行う教育として、幼児の自発的な活動としての遊びを通して育まれるものであることが明記されている。

そこで本研究は、幼児の自発的な活動としての遊び、特に運動遊びを通して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の力を、具体的な体験としてどのように蓄積しているのかを分析することを目的とする。

Ⅱ. 研究の方法

本研究は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点に、実際に展開される運動遊びを分析する。はじめに、今回示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を概観するとともに、この視点を描き出される基盤となる考えを整理する必要がある。その上で、保育実践現場での運動遊びのエピソードを分析する。

分析対象となるエピソードについては、岐阜市にある社会法人H子ども園（以下H子ども園）の実践から行う。本研究の事例は、2018年8月20日（月）、9月11日（火）、9月12日（水）の3日間観察を行った。保育者側から設定された注入型の保育実践ではなく、幼児が自発的に遊びに向かう、自ら選んで遊ぶ遊びが展開されている生活の中で、特に運動遊びを中心にビデオ撮影を行った。そのいくつかの事例を抽出し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点に考察を加えていく。

Ⅲ. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の基盤となるもの

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領全てに共通する考え方である。すなわち幼児教育を行う施設の、幼児の発達をみとめる大切な視点であるとも言える。要領・指針から、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の特徴をまとめると以下の3つとなる。

第1に、あくまでも幼児の自発的な活動を通して形成されていく力であるということである。したがって、保育実践においては、幼児の発達や成長を援助することを意図して、主体的な遊びを中心とした活動の時間の設定を行うなど、より意識的に保育の計画等において位置づけ、実施することが重要とある。

第2に、到達すべき目標ではないことである。したがって、保育実践においては、経験させたい事柄を、保育者からの一方向的な注入によって行うことは適切でない。あくまでも幼児の自発的な活動の中を前提として、その過程で保育者と幼児が対話的に活動を紡ぎ、より豊かな遊びや生活、ひいてはより豊かな文化的活動へと誘っていくことが求められる。

第3に、5歳児だけでなく、それまでの年齢の経験を踏まえて、それぞれの時期にふさわしい経験を積み重ねていくことである。したがって、5歳児のみの記録ではなく、これまで蓄積してきた幼児の学びの履歴を具体的に記録として残していくことが求められる。これまでの記録は、幼児の表出的・表面的な活動記録で終わることが少なくない。幼児の遊びの中から、特に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識し、どのような力が遊びの赤で発揮され蓄積されているのか具体的に記録として残していくことが必要である。その方法として、近年、エピソード記述やドキュメンテーション、ラーニングストーリーなどの手法が用いられるようになってきている。

以上、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の特徴をまとめたが、特に注目したいのは第1で述べた、幼児の自発的な活動を通して形成されるという考えである。これは幼児教育の原風景とも言える本質であり、平成元年の改訂（定）から流れる幼児教育の潮流である。今回の改訂（定）で、さらに強調したのが、「幼児期の教育における見方・考え方」である。幼稚園教育要領解説には、「幼児が生活を通して身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことが重視されなければならない。その際、幼児が環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、

考えたりするようになることが大切である」³⁾と記されている。これは、環境を通した教育の考え方をさらに強調したものであり、あくまでも幼児が主体的に環境に関わっていく過程で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が蓄積・形成されていくものであることが記されている。

さらにこのことは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の各視点の解説を見ても明らかとなる。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、「健康な心と体」、「自立心」、「協同性」、「道徳性・規範意識の芽ばえ」、「社会生活との関わり」、「思考力の芽ばえ」、「自然との関わり・生命尊重」、「数量・図形、文字等への関心・感覚」、「言葉による伝え合い」、「豊かな感性と表現」の10の姿・視点となる。以下、それぞれの姿の解説（表1）を読み解いていく。

表1 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の解説⁴⁾

①健康な心と体 幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
②自立心 身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
③協同性 友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
④道徳性・規範意識の芽生え 友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
⑤社会生活との関わり 家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
⑥思考力の芽生え 身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
⑦自然との関わり・生命尊重 自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。
⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
⑨言葉による伝え合い 先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
⑩豊かな感性と表現 心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

「健康な心と体」には、「自分のやりたいことに向かって」、「自ら健康で安全な生活をつくり出す」と述べられ、保育者主導で運動させるのではなく、幼児自身がやってみたくするための援助や環境により自発的に働きかける姿を描いている。「自立心」には、「環境に主体的に関わり」、「自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げる」など、自発的な活動の過程で自己肯定感を蓄積するように述べられている。「協同性」には、「互いの思いや考えなどを共有」することが重視され、外発的な集団形成ではなく、集団の一人としていかに言動を行っていくか一人ひとりが考える姿が期待されている。「道徳性・規範意識の芽生え」では、「自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したり」、「自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったり」する姿が描かれ、他者からの働きかけで行動を律するのではなく、あくまでも幼児自身の自律性を重視している。「社会生活との関わり」には、「遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりする」幼児の姿が描かれ、幼児が自発的に働きかけ、選択・判断していくことが期待されている。「思考力の芽生え」には、環境に自発的にかかわっていく過程で「気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりする」姿が重視され、「自ら判断したり、考え直したりする」など、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる」と述べられ、幼児自身の考える力が発揮されることを期待している。「自然との関わり・生命尊重」には、「心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚える」姿が描かれ、自発的にかかわっていく原動力とな

る「心を動かされる」興味・関心が重視されている。「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」には、「自らの必要感」の存在が指摘され、遊びや生活の中で興味・関心をもつ事象から活動が展開されることが期待されている。「言葉による伝え合い」には、「経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたり」する姿が期待され、自発的活動の蓄積や、その過程での必要感から、幼児自らが伝えたいという意味を持つことが重視されている。「豊かな感性と表現」には、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる」姿が描かれ、幼児自身の興味・関心、感動などからの出発であることが述べられ、固定的な結果主義ではなく、「表現する過程」を楽しむ幼児の自発的活動を重視している。

このように、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」には、どの視点においても、幼児の自発的活動が基盤となっていることが伺える。言い換えると、保育者主導の一方的な保育の展開では、これらの視点は発揮することができないということである。保育者の意図のもと、個別に取り出されて限定的に指導されるものでないという特徴にもつながる。また、これらの視点は短期間で育つものではなく、自発的な遊びの継続性の中で醸成されていく特徴であることにもつながる。こうした特徴を包含した考えとして、「幼児期の教育における見方・考え方」が描き出されているのである。

IV. 運動遊びにおける「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点とする考察

以上、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を概観してきたが、10の姿全てにおいて、幼児の自発的活動による経験であることが明確に示されている。自発的な活動を通して醸成されるこれらの姿は、実際の遊びにおいてどのように発揮されているのかを検証していくことにする。

検証を行うにおいて、これまで述べてきたように、幼児の自発的な活動が展開されていることが重要となる。本研究でエピソードを抽出するH子ども園は、教育課程の中に、自ら選んでする遊びや生活を重視し、環境に自ら働きかける保育実践を重視している。したがって、本研究が対象にするエピソードは、自ら選んでする遊びの時間に、幼児が主体的に働きかけている遊びから抽出する。

さらに、本研究では、自ら選んでする遊びの中でも運動遊びに注目する。運動遊びは、領域「健康」「表現」で考察・検証される研究が多く、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」では、「健康な心と体」「豊かな感性と表現」など限られた視点に目がいきがちとなる。そこで本研究では、運動遊びから「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が、どのように発揮され蓄積されているか分析を試みる。

(西川正晃)

1. 本研究にて取り上げる運動遊びの概要

本研究では、幼児が主体的に行う運動遊びを観察し、幼児期の終わりまでに育ってほしい幼児の具体的な10の姿がどのような場面で見られるか考察を行った。観察した時間の中で複数のグループによる複数の運動遊びが観察できたが、その中でも、①竹製ののぼり棒を用いた遊び（以下、のぼり棒遊び）、②かけっこ、の2つの遊びを取り上げ、それぞれの遊びにおいて、幼児期の終わりまでに育って欲しい幼児の具体的な10の姿が育成される可能性について、幼児の具体的な言動と照らし合わせて検証した。以下、それぞれの遊びについての説明をする。

1) のぼり棒遊び

直径約5cm、長さ3～4mほどの竹の棒の片側が上部に固定され、地面に対して垂直に垂れ下がっている遊具を用いた遊びである（図1、2）。幼児は、2か所に（2本）あるこののぼり棒にぶら下がってゆらゆら揺れたり、ターザンのように振り子のような動きを楽しんだり、腕と脚を上手に使ってよじ登り、上部の固定部分に取り付けられている鈴にタッチするなどをして遊ぶ。遊び場の下は砂場になっている。

2) かけっこ

かけっこでは、園庭に引かれた1本のラインをスタート地点として一斉に走り、ある地点で折り返してラインまで戻ってきてゴールとなる。スタートからゴールするまでの速さを競う遊びである。スタートの合図は、幼児が行うこともあれば保育者が支援することもあった（図3）。



図2 のぼり棒遊び



図3 のぼり棒遊び



図4 かけっこ

2. 幼児の運動遊びの中に見られる「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」の分析

1) 健康な心と体

幼児期において、遊びを中心とする身体活動を十分に行うことは、多様な動きを身に付けるだけでなく、心肺機能や骨形成にも寄与するなど、生涯にわたって健康を維持したり、何事にも積極的に取り組む意欲を育んだりするなど、豊かな人生を送るための基盤づくりとなる（文部科学省，2012）⁵⁾。反対に、幼児にとって体を動かして遊ぶ機会が減少することは、その後の児童期、青年期への運動やスポーツに親しむ資質や能力の育成の障害に止まらず、意欲や気力の減弱、対人関係などコミュニケーションをうまく構築できないなど、幼児の心の発達にも重大な影響を及ぼすことにもなりかねない（文部科学省，2012）⁶⁾。このことから、主体的な運動遊びにおいて、「健康な心と体」が育成される可能性は十分に高い。

特に、本研究で着目したのぼり棒遊びとかけっこの中では、走ったり、棒にしがみついたり、棒をよじ上ったりすることで鍛えられる全身の筋力や持久力、心肺機能など基礎体力の向上が期待できる。また、のぼり棒を登り切ったところにある頂点の鈴にタッチするという目標を設定し、目標を達成するまで諦めることなく登りきる意欲や気力などを観察することができた。

2) 自立心

自立心の具体的な内容である「身近な環境に主体的に関わりいろいろな活動や遊びを生み出す中で、自分の力で行うために思い巡らしなどして、自分でしなければならないことを自覚して行い、諦めずにやり遂げる」（文部科学省，2016）⁷⁾という観点では、運動遊びの中ではしばしば、主体的にルールや方法を決めそれらを懸命に実行しようとする姿勢が見られる。かけっこは、走って速さを競い合うというシンプルな運動遊びであるが、どこまで行って帰ってくるか折り返し地点を幼児自身が決め、ゴールまで誰よりも速くたどり着くために懸命に走る様子が見られた。のぼり棒遊びにおいても、ぶら下がる、揺れる、よじ登るなど、様々な遊び方を生み出し、工夫して楽しむ様子が見られた。よじ登るという遊び方をしている幼児は、頂点の鈴を目指して諦めずに登りきり、鈴にタッチすることで目標を達成した達成感や満足感を味わっていた。

3) 協同性

運動遊びを友達と一緒にやることにより、自然に協力し合う雰囲気が作られ、互いの意見を共有しな

がら遊びを工夫することから、運動遊びにより協同性は十分に育成可能であると考え。とりわけ、幼児の運動遊びを観察すると、「一緒にやろう」という協力する声掛けに加え、「もっとこうした方がいい」などと主張したり、「こうしよう」などと提案したりする場面が見られた。このように主張したり提案し合うことにより、自分と異なる考えを持つ友達存在に気づいたり、友達の意見に共感したり、友達の良さを知り互いに尊重する姿勢を養うことができると考える。また、自分と異なる考えを持つ友達との交流では、自分の気持ちを上手に表して説得するスキルや相手の気持ちを理解する態度を学ぶことができる。と考える。

4) 道徳性・規範意識の芽生え

のぼり棒遊びにおいて、自分も遊びたいけれど他の子が遊んでいる時にはその子が遊び終わるまで列を作って並んで待つ様子が見られた。また、前の子が長く遊んでいても棒を無理やり奪ったりせず、「遊びたいから代わって欲しい」などとアサーティブに交渉する様子が見られた。

かけっこにおいては、あるラインからスタートし、そのラインまで戻って来るまでの速さを競うという方法で遊ぶことを保育者が主導で決定するのではなく、保育者の支援のもと、幼児同士で決定していた。そして、その場にいる幼児全員が、決められたルールを守ろうとする姿勢が見られた。具体的には、スタートラインをはみ出してよい姿勢を作っている子やスタートの合図よりも早くスタートした子に対して、他の幼児からルールを守るように指摘する声があがり、合図があったらスタートするというルールを徹底する雰囲気が見られた。競争が白熱し、幼児同士で言い争いが起こった際には、周りでその様子を見ていた幼児から、「誰も悪くないよ」、「一生懸命走ったらみんな1位」などという発言もあり、ルールを守って遊ぶ中でも友達と折り合いをつけながら誰も傷つかないように配慮する様子が伺えた。

さらに、のぼり棒遊びの最中に、振り子のように揺れていた幼児が順番を待っていた幼児にぶつかり、その勢いで順番を待っていた幼児が転ぶアクシデントがあった。順番を待っていた幼児が痛みと驚きで泣きそうになっていたところに、ぶつかった幼児が申し訳なさそうに近づいて謝り、遊んでいたのぼり棒を譲る姿が見られた。ぶつかってしまった幼児は、故意的でなかったことを主張したり、相手が近くにいたことを責めたりするのではなく、自分がぶつかってしまったことを反省し、「謝る」という行動を選択した。この場面では、他者の立場に立って相手の気持ち考え、思いやりを持って関わるという道徳性・規範意識が、幼児の具体的な言動により観察できたと考える。

5) 社会生活との関わり

本研究にて着目したのぼり棒遊びとかけっこだけではなく、また、運動遊びかそうでないかに限らず、遊具や遊び場は自分だけのものではなく共有のものであるという認識があるようであった。それは、例えば、のぼり棒を独り占めするのではなく交代で遊ぶなどのような行動に顕著に表れていたように見受けられる。

また、のぼり棒遊びにおいては、年代の異なる幼児同士の関わりも見られた。このように同級生だけではなく他の年代の幼児とも交流することにより、遊びや生活に必要な情報を伝え合うことや多様性の理解も深まると考えられる。

6) 思考力の芽生え

のぼり棒遊びにおいて、足元の砂場の中央部分を掘ってその砂を周囲に積むことにより山と谷を作り、山から谷を越えてもう片側の山にターザンのように飛び越える遊びを行う幼児がいた。スコップを持って砂を掘り、山と谷を作る理由を尋ねたところ「その方が楽しいから」と答えた。この様子から、与えられた環境の中で遊ぶことに満足するのではなく、遊びが深まる中で主体的に環境に働きかけ、より楽しく遊ぶための工夫、探究をしていることがわかる。このことは、まさに、「身近な事象に積極的に関わり、物の性質や仕組み等を感じ取ったり気付いたりする中で、思い巡らし予想したり、工夫したりなど多様な関わりを楽しむようになる」(文部科学省, 2016)⁸⁾という思考力の芽生えに関連すると考える。運動遊びを工夫しながら実行し、その結果を振り返ることを繰り返しながら、さらなる新たなアイデアを生み出すきっかけとなる重要な視点であると言える。

また、この作業の過程では、友人と一緒に砂を掘ることにより「協同性」も深めることが可能であり、砂の高低差を作ることでスピードを出すように工夫していることから「数量・図形、文字等への関心・

感覚」も同時に育成される可能性が期待できる。そして、身近な環境に主体的に関わるという視点では、「自立心」とも関連していると考ええる。

7) 自然との関わり・生命尊重

園庭での運動遊びにおいては、自然との関わりが見られた。例えば、のぼり棒自体が竹でできていること、のぼり棒遊びの足元は砂場となっていることが挙げられる。また、かけっこにおいても、折り返し地点を決定する際に、「あのお花のところまで」など植物を目印にする表現が見られ、自然を身近なものとして捉え、関心を持っていることが伺えた。

8) 数量・図形、文字等への関心・感覚

運動遊びにおいて、自分たちに関係の深い数量、長短、広さや速さ、図形の特徴などに親しむ体験(文部科学省, 2016)⁹⁾は、非常に多いと考える。例えば、かけっこは、スタートからゴールするまでの「速さ」を競う遊びである。そのため、幼児は、いかに速く走るかということや、速さを変えられないのであればいかに早く戻ってくるか、などを工夫していた。また、スタートライン(ゴールライン)には直線が引かれており、それ以外にも丸や四角、円柱など、運動遊びの遊具などには多くの図形が存在する。

のぼり棒遊びでは、振り子のような動きを楽しんでいる幼児が多く、その勢いや振り幅を大きくする工夫をしていた。また、思考力の芽生えの項目において前述したとおり、足元の高低差を作ることによってスピードが増すことにより、遊びがより楽しくなることを認識し、砂を掘って山と谷を作るなど工夫をしていた。このように運動遊びと数量や図形などとは密接に関わっており、幼児期の遊びの中で親しむことにより、小学校以降の学習への興味関心や学習意欲を高め、理解を深めることにもつながると考えられる。

9) 言葉による伝え合い

言葉による豊かな表現、思いの伝え合いは、運動遊びの場面において活発に行われていた。協同性の項目にも挙げたように、運動遊びにおいてより楽しくするための主張や提案などは、主に言語を用いて行われていた。同様に、遊びのルールを決めたり、そのルールを守ろうと論じたりする道徳性・規範意識の芽生えに関連する内容においても、言葉による伝え合いが行われていた。

特に、道徳性・規範意識の芽生えの項目に例として挙げたのぼり棒遊びの最中に順番を待っていた子にぶつかってしまった幼児は、その後、同じような状況が起こりそうな時に、「〇〇くん、そこおると危ないよ、さっきみたいになるから」と声を掛けていた。このように、運動遊びの中では、幼児同士で言語を用いて明確に注意喚起をする場面も見られた。さらにこの発言は、過去の運動遊び経験を基に状況を適切に予測、判断したうえで安全に遊ぶためにかけた、危機管理意識に基づいた予防的な発言である。運動遊びにおいては、安全に怪我なく遊ぶことが重要であるものの、幼児だけでは危機管理が不十分であることも多く、保育者や周囲の大人の支援が必要なこともある。しかし、この事例のように、過去の運動遊びにおける経験から幼児自身の危機管理意識や予測力が育成され、リスクの原因となる事象の防止のために言語を用いて危険性を伝えるという、より高度な力の育成も期待できることが確認された。さらに、このことは、自ら健康で安全な生活をつくり出すという「健康な心と体」にもつながる視点であると考ええる。

10) 豊かな感性と表現

本研究では、表現運動遊びについて着目していないものの、幼児が感じたこと、考えたこと様々な形で表現する機会は多くあった。例えば、かけっこにおいて、はやく走ることができた幼児は喜びを表現し、思うように走ることができなかった幼児は悔しそうにしていた。そのような表現が保育者や友達に受け止められることにより、表現する喜びや楽しさを実感し、豊かな感性と表現が育成される可能性は高い。

(煙山千尋)

V. 結語(おわりに)

以上、運動遊びから「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を抽出し、分析を行ってきた。これらのことから以下の2つのことが明らかとなる。

第1に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、発達の視点として存在する5領域それぞれに、

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」全ての視点が発揮されるということである。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「健康な心と体」を例に挙げると、この視点は領域「健康」においてはすすんで運動しようとする姿につながる。領域「人間関係」では、自分の力で行動することの充実感につながる。領域「環境」では、身近な環境に親しみ、生活に取り入れていこうとする姿につながる。領域「言葉」では、自分なりの言葉で表現するという、自分のやりたいことに向かっていく姿に現れる。領域「表現」では、豊かな感性を養うという、自発的な創造性につながっていく。このように、各領域のフィールドから「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が育成され、それらが束になるように重なり合い、幼児教育において育みたい資質・能力の形成へとつながっていくのである（図5）。

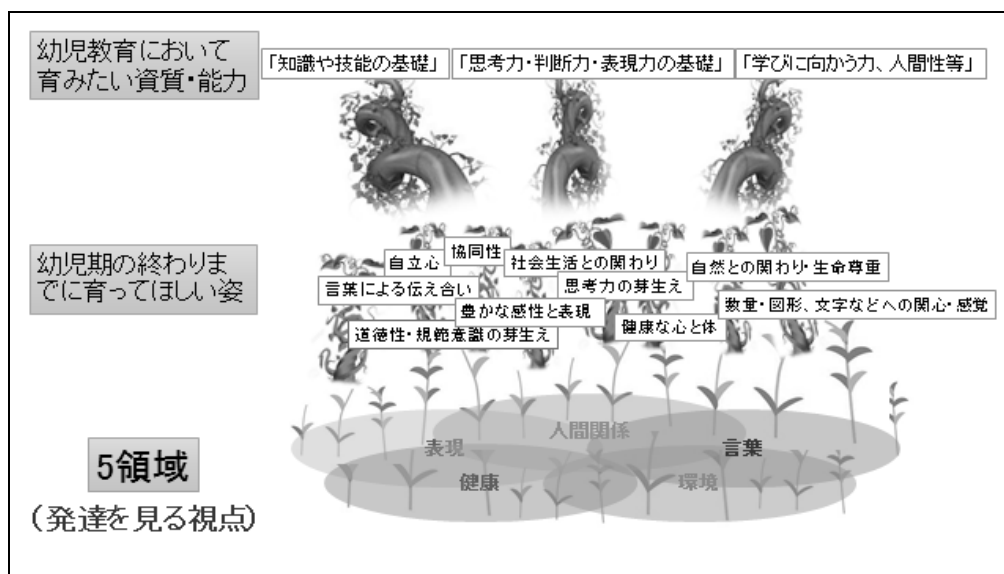


図5 「領域」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」¹⁰⁾

第2に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、各視点が単独で表出するのではなく、他の視点と相互にかかわり合って存在するということである。分析の結果からも明らかなように、運動遊びには、10の姿全ての経験が認められた。さらに、それぞれの視点が単独で蓄積されるのではなく、他の視点と相互に影響を与え合い、複合的に発揮されている。

今後は、運動遊びから「幼児期の終わりまでの育ってほしい姿」育成の可能性を引き続き検証するため、MOVERS (Movement Environment Rating Scale)¹¹⁾ を用い、体を動かす遊びのための環境の質を検討していきたい。

(西川正晃)

注・文献

- 1) 文部科学省（2016）：中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会幼児教育部会審議の取りまとめ（平成28年8月26日）
- 2) 文部科学省（2018）：幼稚園教育要領解説（平成30年3月）、フレーベル館、52.
- 3) 同上、28.
- 4) 幼稚園教育要領などを参考に、西川が一覧にまとめたもの。
- 5) 6) 文部科学省（2012）：幼児期運動指針（平成24年3月）
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm
- 7) 8) 9) 文部科学省（2016）：幼児教育部会における審議の取りまとめ（平成28年8月）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/sonota/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377007_01_4.pdf
- 10) 幼稚園教育要領などを参考に、西川が関係・構造図として作成したもの。
- 11) MOVERS (Movement Environment Rating Scale) とは、体を動かすための環境の質と教育方法を評価するスケール。2018年に日本語版が、秋田喜代美監訳・解説のもと、明石書店より刊行された。